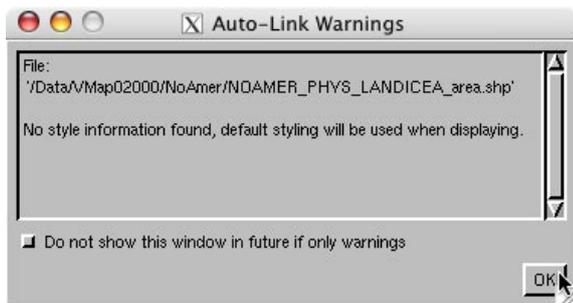


# 自動リンクの解決方法

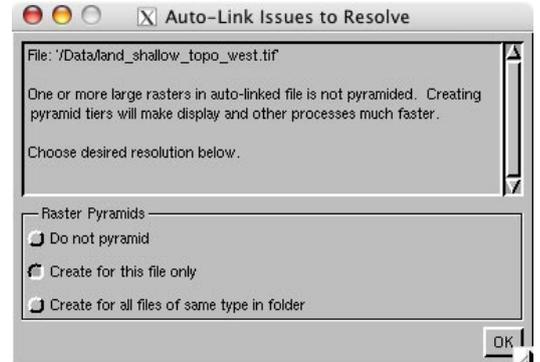
シェイプファイル (\*.shp) や JPEG2000 (\*.jp2) などの、TNT 製品で直接利用が可能なファイルを選択すると、スタイルやジオファレンス情報などの必要なデータコンポーネントが見つからない旨を知らせるウィンドウが出ることがあります。必要なコンポーネントがないというメッセージは「自動リンクの警告」または「解決すべき自動リンク問題」ウィンドウに表示されます。非常に多くの要素のあるレイヤを選んだときに「密集レイヤ確認 (Dense Layer Verification)」ウィンドウが出ることもあります。このウィンドウは TNTmips のプロジェクトファイルフォーマットの図形オブジェクトについても同様の状況で現れることがあり、テクニカルガイドの「巨大ベクタの表示の管理 (Managing Display of Large Vectors)」で解説されています。直接使用できるファイルの一覧はテクニカルガイドの「外部空間データファイルの自動オープン (AutoOpen External Spatial Data Files in TNTmips)」の裏面をご覧ください。



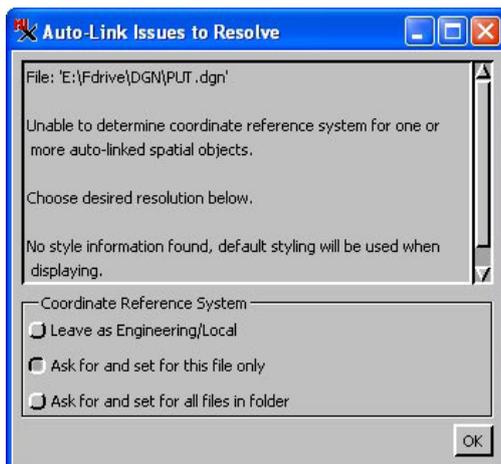
「自動リンクの警告」ウィンドウはいたってシンプルで、単に必要なコンポーネントが見つからず TNT 製品ではそれ以上解決できなかった、ということを知らせるだけです。このウィンドウはスタイル情報などのオプション情報の欠損にも使用されます。警告ウィンドウが表示されたプロセスでそのオブジェクトに対して新しいスタイルを作ることができます。付随するスタイル情報はありますが、実は名前が違っているということもあります。シェイプファイルに関するスタイル情報があつたはずであれば、シェイプファイルのあるフォルダをチェックしてください。シェイプファイルと違う名前の \*.avl ファイルがあるかもしれません。もし適合した

シェイプファイルがあれば、他の関連ファイルと同じファイル名に変更して、リンクファイル (\*.rlk) を消去します。そして再度シェイプファイルを表示してみます。リンクファイルには、データベーステーブル、ベクタの最適化情報、ラスタピラミッドのような、もともとのフォーマットではサポートされていない追加情報が含まれています。リンクファイル中にスタイル情報が残っている可能性があるため、リンクファイルに大きな変更を加えていなければ、リンクファイルを削除してみてください。

巨大ラスタでのピラミッド作成は、画像を全体表示したり、最大解像度以下で表示する場合重要です。ウェーブレット圧縮を使って直接表示可能なラスタファイルは JPEG2000、MrSID、ECW ファイルですが、もともとピラミッド構造を持っています。他のラスタファイルにはピラミッド構造はありません。画像の各辺が 1000 セル以上あるピラミッド構造を持たない外部ラスタファイルを選択した場合、「解決すべき自動リンク問題」ウィンドウが出ますので、3つの方法から処理方法を選択します。ピラミッド作成後の表示時間の改善と比べれば、巨大ラスタのピラミッド化にかかる時間は、十分小さく、価値があります。これらのピラミッドは、他の表示パラメータに対する修正と同様、同じ名前のリンクファイル (\*.rlk) に保存されます。高解像度ディスプレイがあり、選択したラスタのサイズが各辺 1000 ピクセル以下であればピラミッド構造を作らない選択をしてもよいでしょう (最大詳細度でラスタ全体を表示しても表示ウィンドウに収まるので)。それ以外の状況では、ラスタのピラミッド化を強くお勧めします。ファイルのピラミッドを生成するオプションとしてファイルを 1つ 1つ表示して適用するか、またはフォルダにある同タイプの全ファイルに対して適用するかはあなたの自由です。



また、測地系が定義されていない等でファイルの座標参照系情報が不完全な場合、座標情報を自動リンクファイルの一部として与えられます。座標系の情報が無かったり、ファイルがローカルの座標系を使用している場合は、[ローカル座標のままにする (Leave as Engineering/Local)] を選択して下さい。詳細情報がすぐに分からないが、表示したければ、[サポート / メンテナンス / 座標参照系の修正 (Support/Maintenance/Change Coordinate Reference System)] を使って正しい座標参照系を定義できます。情報がすぐに入手できるのであれば、デフォルトのオプションを選択して、提供する情報を選択したファイルのみに適用するか、または、[フォルダ中の全ファイルに確認し適用する (Ask and set for all files in folder)] を選択して、「座標参照系」ウィンドウで指定する情報をそのフォルダの同じ種類のファイル全てに適用します。



例えば、測地系が定義されていない等でファイルの座標参照系情報が不完全な場合、座標情報を自動リンクファイルの一部として与えられます。座標系の情報が無かったり、ファイルがローカルの座標系を使用している場合は、[ローカル座標のままにする (Leave as Engineering/Local)] を選択して下さい。詳細情報がすぐに分からないが、表示したければ、[サポート / メンテナンス / 座標参照系の修正 (Support/Maintenance/Change Coordinate Reference System)] を使って正しい座標参照系を定義できます。情報がすぐに入手できるのであれば、デフォルトのオプションを選択して、提供する情報を選択したファイルのみに適用するか、または、[フォルダ中の全ファイルに確認し適用する (Ask and set for all files in folder)] を選択して、「座標参照系」ウィンドウで指定する情報をそのフォルダの同じ種類のファイル全てに適用します。